

親なき後の未来に挑戦する、しょうゆうかい章佑会の福祉

(この記事は『やくしん』2020年5月号に記載された「経営に生きる、経営に活かす(第五回)」の記事を転載しております。役職等は当時のものです。)

社会福祉法人章佑会理事長 **馬場康雄**さん

福祉とは、「しあわせ」や「ゆたかさ」を表わす言葉。多様化する社会において、地域に根差した福祉を目指して一人ひとりの人生をサポートする、「社会福祉法人章佑会」。積極的な施設展開の背景にどのような思いがあるのか、理事長の馬場康雄さんにお話を伺った。



継ぐ気のなかった息子が、福祉の道へ

「社会福祉法人章佑会」は「あらゆる人に生きる夢と勇気と希望を提供する」という理念を掲げ、一九九四年に設立された。東京都練馬区を中心に七つの高齢者施設、十一の障害者支援施設のほか、練馬区石神井台や埼玉県和光市で高齢者および障害者が入所する複合施設を運営。東京、千葉、栃木の各地域でさまざまな福祉サービスを提供している。いまは亡き父の章介さんが抱いていた障害者施設建設の夢を、母の八重子さんが形にし、それを息子である馬場康雄さんが受け継ぎ、理事長として経営にあたっている。

高齢者向けの福祉活動として、デイサービスやショートステイなどのサービスを提供。障害者向けには、生活介護、就労継続支援B型、就労移行支援、居宅系の事業などを主サービスとする。そのほか、施設入所支援、グループホーム・ケアホームなど実に多様なサービスを展開している。利用者に応じて、柔軟に対応できる環境整備がなされており、日常生活や自立をサポートする質の高いサービスが評価を得ている。

今回訪問した「やすらぎの里大泉」は、特定養護老人ホームやデイサービス、ショートステイなどを提供する高齢者施設。老人ホームとして五十名の入所者を受け入れるこ





まるで自宅にいるようなゆったりとした個室



温かいベージュ色を基調とした建物

とができ、デイサービスは一日三十五名、ショートステイも四名程度対応が可能だ。毎日、十二人の職員が勤務している。

訪れた日は、一階の広く開放的なデイルームでチーム対抗のレクリエーションが実施され、大いに盛り上がっていた。入所者や職員たちが生き生きと過ごしているのが印象的だ。「日中は活発に活動し、夜は十分に休息をとる。規則正しい生活のできる一日のプログラムを組んでいます」と優しい眼差しで入所者を見守りながら話す馬場さん。

大学卒業後に川崎重工業株式会社に入社した馬場さんは、設計部門で働いていた。当時は福祉の仕事に継ぐことは考えておらず、目の前の仕事に邁進していた。そんなとき、父にがんが見つかった。馬場さんは、余命六か月程だといわれた父と喫茶店でじっくりと話をした。父の福祉への思い、そしてやり残したことに対する無念さを聞き、これまでに

ない使命感を感じ、福祉の世界に挑戦することを決意した。川崎重工業を退職し、福祉の道へと歩みを進めることになった。三十歳。一九八六年のことだった。

「親なき後」に使命感をもつ

そもそもの始まりは約四十五年前に遡る。父は、養護学校（現在の特別支援学校）の卒業生二名が働き口を探していると相談を受け、作業所をつくることにした。その時、馬場さんの母で、現在の大泉学園実習ホームグループの会長を務める八重子さんは、立正佼成会のお役でボランティア活動などを精力的に行っていた。父は、仕事として作業所の運営を母に提案。その思いに応え、一九七七年に練馬区で無認可の福祉作業所「大泉学園実習ホーム」を開所した。民間事業者が都内で認可基準に適合した施設を建設するのは困難なため、自治体の補助金なしで誕生させた施設だった。小規模福祉作業所の開所は、当時は画期的で在宅福祉・地域生活支援の先駆けになるものだったという。



笑顔があふれ、盛り上がるレクリエーション。



館内にはぬり絵など入居者たちの作品が展示されている。

親御さんが最も不安を抱くのは、「自分たちがいなくなった後」のことだ。父は入所者たちの「親なき後」に対しての支援が必要だと痛感していた。入所者の社会的自立を促しそれぞれの幸せを実現するためには、無認可の施設ではなく法人化した組織であったほうがいい。ところが、父の計画する障害者更生施設を建設する場合、千坪程度の土地が必要条件で都内では膨大な資金が必要だ

った。そこから、建設可能な土地を求め各地を転々とする。二～三年探し、見つからず諦めかけていたところに一本の電話が入り、建設地が見つかった。聞けば、馬場さんが時間をかけ必死に土地を探していることを知った不動産屋が、その諦めない姿勢を見て連絡をしてくれたという。「信じて前に進んでいけば、菩薩のような人が現れるのだと思いましたね。自分たちの姿勢を仏さまは見てくれていた」と馬場さんは思ったという。

縁のあった千葉県君津市で、一九九一年に社会福祉法人を設立し、障害者の入所施設を完成させた。そこからは一気に広がっていき、各地での実績の積み重ねが評価されていった。その頃、練馬区で作業所を運営する母には、「福祉で金儲けをしている」と心無い言葉を放つ人もいたという。

そこで福祉作業所の意義を多くの人に理解してもらおうと、作業所の入所者たちによる弁当配達の取り組みを行なった。やがて一人暮らしのお年寄りに向けた配達の評判となりビジネスとして成り立つまでに成長した。地道な活動が実を結び、徐々に地域住民に受け入れられていったのだ。

紆余曲折あったが、馬場さんたちが諦めず信じた道を愚直に進んだ結果、練馬区から補助金を出す形の施設建設の相談が飛び込んできた。現在の高齢者施設「やすらぎの里大泉」の誕生だ。「親なき後」をサポートしたいと願いながらこの世を去った父の思いを、母と馬場さんがカタチにした。

人を育て、章佑会の福祉をつなげていく

肉体的にも過酷で人材不足と言われる介護福祉の世界。ところが、章佑会が運営する全施設の職員は七五〇名を超え、定着率は九十%以上を誇る。利用者の高い満足度だけでなく、職員も職場に誇りをもって働くことができているようだ。施設内に一歩足を踏み入れば、職員は明るく柔らかな表情で来訪者に挨拶をし、入所者にきめ細やかな対応を行なっている。「それでも人材育成が急務」と馬場さん。いま、難し



広々と快適な館内空間。

い舵取りを余儀なくされているという。

「三年赤字が続くと新たな施設建設の企画、提案が行政にできなくなります。また来年は、新しい施設の建設を予定しており、職員を百人募集します。施設を維持し、発展させるため、現場あるいはチームを牽引する人材が必要なんです」。

すべての職員が満足して長く働いてもらえるよう、経営者として職場環境を整えることは重要。そのうえで職場を理解し施設運営をリードする人材は、持続的な施設発展のために不可欠だ。

人材育成の一つとして、章佑会は働く職員の心の方針「やすらぎ福祉道」を掲げている。福祉のプロとして、人を動かすときの心得やリーダーの心得、逆境時の心得、修練の心得といったことを端的な言葉で示したものだ。「心得の根本は『相手の気持ちになる』ということです。人が喜ぶことをし、人にされて嫌なことはしないという、ごく当たり前のことも忘れぬよう、経営者として章佑会の理念浸透に努めていきたい」と馬場さん。

馬場さんは、母が立正佼成会で得た教えを信じ、行動し続けたことで救われてきた姿を見てきた。だから「信じて突き進めば、自ずと結果が出る」と信じている。

「課題は山のようにあります（笑）。それでも、父の意思を受け継ぎ『親なき後』のサポートをすることに使命感を持ち、未来を見据えて一步一步進んでいきたいと思えます」

今後、馬場さんの体現する「親なき後」のカタチは一体どのようになっていくのだろうか。地域の福祉、日本の福祉を創造する章佑会に注目したい。



●ばば やすお

練馬教会所属。1956年、東京都江戸川区生まれ。千葉大学卒業後、川崎重工工業株式会社に入社し設計部門に配属され経験を積む。父のがんが発覚したことを機に、福祉にかける父の想いを聞き感銘を受け、自身も福祉の世界に入ることを決意。多様化する社会に対応した新たな福祉サービスを創造し、人びとがやすらぎをもてる地域・社会づくりに貢献している。